

令和8年5月15日

初夏の高温に対する技術対策について

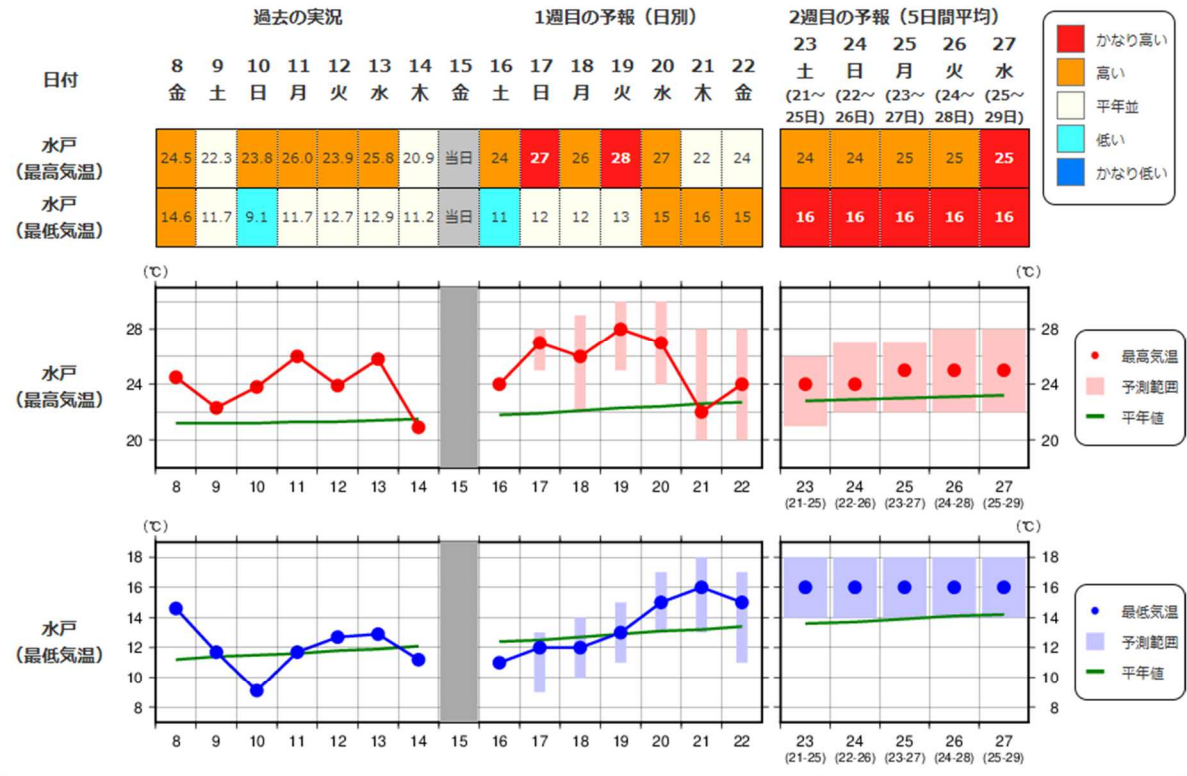
農業総合センター
専門技術指導員室

●気象情報

2026年4月21日に気象庁が発表した「向こう3か月の天候の見通し（5月～7月）」によると、本年5月～7月は暖かい空気に覆われやすく、気温は全国的に高くなると予想されるため、農作物の生育等への影響が懸念されるところです。

このため、高温による農作物等の被害防止に向けて栽培管理等に注意するとともに、熱中症の危険性も高まりますので、農作業時の健康管理に十分注意してください。

【茨城県の2週間気温予報(2026年5月15日 14時30分更新 気象庁ホームページより)】



●熱中症対策

- ・熱中症対策として、高温下での長時間作業を避け、こまめな水分と塩分の補給や休憩をとることに加え、冷却ベスト、ネッククーラー、深部体温を計測する機器などの熱中症対策アイテムを効果的に活用すること。特に、高齢者はのどの渇きや暑さを感じにくく、気が付かないうちに熱中症になる可能性があるため、単独での作業を避ける、異常がないか家族や従業員等が定期的に巡回を行う等の対策を行う。
- ・令和7年6月1日から改正労働安全衛生規則が施行され、熱中症の重篤化を防止するための「体制整備」「手順作成」「関係者への周知」が雇用主に義務付けられました。

●チェックリストと農業版BCPの活用

- ・「自然災害等のリスクに備えるためのチェックリストと農業版BCP」（農林水産省ホームページ https://www.maff.go.jp/j/keiei/maff_bcp.html）を活用して、自然災害等のリスクに対する備えの意識を高めるとともに、農作物等の被害防止に向けて事前に必要な対策の実施に努める。

●対策技術

I 共通事項

（1）栽培管理全般

- ・高温が続くことにより、農作物の生育ステージの急激な前進が想定される場合は、農業計画の適切な見直しや農業資材等の確保に留意する。また、県病虫害防除所の病虫害発生予察情報の収集及び適期防除に努める。

（2）農業用水の確保

- ・農業用水の確保のため、関係機関との調整を図り、計画的な配水が行われるよう配慮する。

II 作目別対策

1 普通作等

（1）水稻

- ・生育前半が高温であった場合、過剰分げつや籾数過多が見られることから、適正な基肥の施用、栽植密度の調整、中干しの徹底等に努める。
- ・籾数過多に対応する中干しは、田植後 30～40 日を目安に開始し、5～10 日間程度（田面に軽くヒビが入る程度）を目安に実施する。
- ・中干し後は、入水と自然落水を繰り返す間断かんがいを行う。入水のタイミングは、砂質のほ場なら田面に触れると湿り気を感じる程度、粘質のほ場なら田面に触れると水が付着する程度である。

- ・なお、肥効調節型肥料（いわゆる基肥一発肥料）を使用した場合でも、ほ場での生育・栄養診断の実施による適切な追肥に努める。

（２）麦類

- ・収穫期を迎える地域では、収穫機や乾燥調製施設の整備を完了し、成熟期が早まった場合に刈り遅れとならないよう気象予報等に留意した計画的かつ効率的な収穫作業に努める。

（３）大豆・子実用トウモロコシ

- ・播種直後の干ばつは、出芽遅延が発生するため、ほ場の乾き具合に注意する。乾燥による発芽不良を防ぐため、碎土、整地、播種時の覆土・鎮圧を丁寧に行うと共に、必要に応じてやや深播きにする。

（４）茶

- ・急激な茶芽生育により摘採適期から遅れることがないように、茶園巡回による生育状況の把握に努め、茶工場の処理能力も考慮した計画的な摘採を行う。
- ・摘採後の生葉は、直射日光や高温条件下に晒さないように可能な限り速やかに加工場へ運搬するとともに、工場到着後は速やかに生葉コンテナ等に移して葉温を下げ、葉傷みとならないように留意する。
- ・摘採後の茶園においては、周辺茶園の摘採状況と病虫害の発生状況等を把握し、適期防除に努める。

２ 野菜

（１）全般

- ・かん水は、土壌水分や生育状態等を十分考慮し、早朝・夕方に実施する（夕方のかん水はやりすぎに注意すること）。特に高温が予報される日は、必要に応じて１日当たりのかん水回数を増やす。また、地温上昇の抑制や土壌水分の保持を図るため、地温抑制マルチや敷わら等は使用時期に留意したうえで活用する。高温耐性品種の選定に当たっては、立地条件、品種特性、需給動向等を十分に考慮する。
- ・施設栽培は、①換気、②遮光遮熱、③気化熱利用の複数技術を組み合わせた対策を行う。
 - ①換気：天窓や側面および妻面を解放するとともに、外気導入器や換気扇の併用により、換気量を増やすことも有効である。パイプハウスでは、妻面や肩部からの換気により換気量を確保する。
 - ②遮光・遮熱：遮光・遮熱資材は施設内の温度上昇を抑制し、果実の日焼けや葉やけの防止にも有効であるが、作物の光要求量に応じた資材を選択する。
 - ③気化熱利用：細霧冷房は過湿にならないように循環扇や換気を併用しながら、適切に利用する。蒸散の促進により植物体の温度を下げるため、灌水を適切に行うことも重要である。
- ・こまめな除草や側枝、弱小枝及び下葉を除去し、風通しを良くする。
- ・育苗期は、育苗箱をコンテナやブロックでかさ上げし、風通しを良くする。また苗の間隔を十分に広げておく。葉焼けや軟弱徒長の発生に注意し、午前中を中心にかん水する。

- ・苗の定植に際しては、降雨が少なく土壌の乾燥が続く場合は、降雨後の定植や苗の活着促進のために定植後に株元へのかん水を行う。
- ・高温条件下で発生しやすい病害虫の早期発見に努め、生育ステージに応じた的確な防除を行う。なお、高温時の薬剤散布は、薬害発生の恐れがあるので避ける。

(2) 葉茎菜類

- ・多湿による軟腐病が発生する恐れがあるため、畝間かん水は控える。
- ・ハウス葉物において、高温・乾燥条件の環境下では、ハダニ類やアザミウマの発生が増えるので、こまめな観察と早期防除に心掛ける。
- ・収穫遅れによる規格外品、傷みの発生を抑えるため、適期収穫に努める。

(3) イモ類

- ・適度な土壌水分（土壌を握ると固まり、軽く崩れる感じ）でのマルチ張りを心掛ける。
- ・6月中旬以降の挿苗は活着不良や肥大不足の原因になるため、早めに挿苗するか、止むを得ずそれ以降に挿苗する場合は、日中の高温時を避ける。
- ・近年、鱗翅目害虫（ナカジロシタバ、ハスモンヨトウ等）の発生時期が早まっているため、早期発見に努め、適切な防除を行う。

(4) 果菜類

- ・不良果の摘果、若採りを行い、着果負担の軽減を図るとともに、適切なかん水・施肥により樹勢維持に努める。
- ・老化葉、黄色葉を中心に適切に摘葉し、水分の過剰な蒸散や呼吸の抑制に努める。
- ・気温上昇に伴い、過熟果や果実の傷みが発生しやすくなるため、食味を損なわない程度に若採りをし、収穫間隔を短くする。品温の低い時間帯に収穫し、収穫後は速やかに低温・適温で管理する。

3 果樹

- ・高温で土壌が乾燥すると、葉などからの蒸散作用が抑えられ高温障害が助長されるため、土壌が乾燥しないよう早めのかん水を励行する。
- ・高温によって果実の日焼けが発生しやすい園地においては、各種資材による遮光等の対策を検討する。
- ・気温の上昇に伴い果樹カメムシ類が活発に活動し始めるので、園地への初期の飛来に注意し、飛来が認められた場合は防除を実施する。
- ・ブドウでは果粒軟化期（ベレーゾン期）前の果房は、日やけ症、縮果症などの生理障害が発生しやすいので、この時期の過度な摘房、摘粒や摘心を避け、果房に傘かけを行う。
- ・収穫にあたっては、糖度や食味の確認を早めに行い、過熟とならないよう努めるとともに、収穫後の果実温度が高くならないよう注意して取り扱う。

4 花き

- ・かん水は立地条件や品目、生育状態等を十分考慮し、早朝・夕方に実施する。施設内でのかん水は、湿度が高くなりやすくなることから、夜間や曇雨天の日中には、通風する

などして湿度を下げる。

- ・切り花については、朝・夕の気温の低い時間に採花し、常温で長時間放置しない。また、エチレンによる劣化を防ぐため前処理剤を使用し、品質の維持に努める。
- ・施設栽培の花きについては、施設内の温度上昇を抑制するため、妻面・側面を開放するとともに、作物の光要求性に応じて、遮光資材等を使用する。細霧冷房装置、換気装置等を設置している施設では、当該装置を有効に利用して適切な温度及び湿度の管理に努める。（その他野菜の対策内容参照）